

マタイ福音書2章の記事によると、イエスが生まれたとき、東方から占星術の学者たちが贈り物を携えてやってきました。そのことを知ったヘロデ王は、不安を抱いたということです。それは占星

術の学者たちがユダヤ人の王がお生まれになったと言ったからです。ヘロデ王は自分の地位が脅かされるかもしれないと、不安感を抱いたのです。

このことは冷静に考えてみれば、おかしなことです。今生まれたばかりの赤ん坊は無力ですし、すぐさまヘロデ王の権力を脅かす存在にはなりえないからです。けれども、権力の座にある者は、少しでも自分の地位を脅かす可能性がある存在はすぐさま抹殺するのが常道です。

そこでヘロデ王はイエスをすぐさま殺そうとしたのですが、そのイエスのことが特定できなかつたので、ベツレヘム地方の2歳以下の男児をすべて殺したのです。

その後、「ラマで声が聞こえた。激しく嘆く悲しむ声だ」とあります。これは旧約聖書のエレミヤ書31章15節からの引用で、子どもを殺された母親の大きな悲嘆を表しています。一人の人命が失われるとき、そこには家族をはじめ多くの人の嘆きがあります。イエスが生まれた喜びの時、一方では命を無くした人たちの激しい嘆きがあったのです。

同じように、現在私たちの世界でも、命をなくした人たちへの多くの嘆きがあることを知らされています。イスラエルによってガザ地区のパレスチナ人の人たちが空爆で殺されている現実があります。依然としてロシアによるウクライナへの攻撃が納まりを見せていません。映像で見ることありますが、一番怖いと思えるのは、嘆き悲しんでいる人間の映像を見ても、またか、という感じで自分がどこかで無感覚になっていつているところがあることです。

ベツレヘム地方で2歳以下の男児が殺されたとき、天使が聖家族に危険を知らせたことで、イエスの両親はエジプトに逃れることができました。危うく難を逃れたイエスの両親ではありましたが、おそらく、ベツレヘムで子どもを殺された親たちの嘆きをイエスの両親も共に嘆いたことでしょう。やがて、この出来事をイエスも両親から聞いたことでしょう。そして、この原体験があつて、イエスが悲しむ者の悲しみを共にする生涯を歩むことへと導いたと思われるます。このようにイエスが誕生したことで、救い主がこの世に与えられたのですが、一方で、多くの無垢な子どもたちの命がヘロデ王によって奪われたのです。

さて、このような暗黒の時代にあつて、ヨハネ福音書1章は『初めに言があつた』という表現で、言がイエス・キリストであるということです。ヨハネ福音書にはマタイ福音書やルカ福音書のようにイエスの降誕物語は登場しません。ヨハネ福音書に「言であるイエス・キリストの内に命があつて、この命は人間を照らす光であつて、この『光は暗闇の中で輝いている』(5節)というのです。イエスは、暗闇が支配する世界に「命の光」としてこられた存在だということです。つまり、愛する者の命を奪われて嘆く人間に「命の光」を与えるために来られた存在だということです。私たちが生きているということは、神に生かされている命を持つているのですが、この命を十分に自分自身で生かし切っているかというところがあります。自分の人生だからと

いうことで、逆に粗末にしているところがあります。あるいは、自分の人生だから誰にも邪魔されたくないと考えてことで、自分ファーストになっていることになんの疑問も抱かないような人間になっているところがあるようにも思われます。けれども、そのような未熟で傲慢な人間存在を命の光なるイエスが照らすために、この世に來られたということをヨハネ福音書は告げています。

そして、神によって与えられたとしか表現できない、この命を生かすためにイエス・キリストが來られたということをヨハネ福音書は更に次のように言っています。『神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである』(3章16節)。ここに、クリスマスの本当の意味が言い表されています。イエスがなぜこの世にお生まれになったのか。それは私たち人間に本当の命を与えるためだったのです。

1〜5節によると、イエス・キリストの内に命があつて、その命は人間を照らす光であつた。命の光であるイエスは人間を照らす光であり、暗闇の中で輝いているのですが、5節の後半で『暗闇は光を理解しなかつた』と、暗闇の無理解を指摘しています。

この暗闇とは、この世の権力やこの世的な価値観によって私たち人間が生きていく目標を見失っている状況のことです。暗闇という表現は、神の導きが私たち人間に届いていない状況をも表しています。神の導きがあるのに、それを人間の側でとらえきれないのは、イエス・キリストの内にある命が人間を照らし続けている光であるにもかかわらず、その光の導きを人間の側で拒絶している現実があるからです。人間を照らし続けている光があるという事は、私たちの心の内面はイエス・キリストによって隅々まで照らされ、明るみに出ないものはないという状況になっているのです。私たちが抱える心の闇までも明らかにされて、言い訳や言い抜けができないように、すべてが白日の下にさらされるのです。しかも、言い逃れしたいような自分の心の闇がただ指弾されるのではなくて、本来の真実さを取り戻すかたちで光輝く存在へと生まれ変わらせるのです。それはイエス・キリストが憐れみ深く私たち人間に関わって下さるからです。

この愛に満ちた関与によって、それまで自分の内面に巢食っていた悪が善なるものへと生まれ変わり、それまで抱えていた悪そのものがその後の人生を良い方向へと導いていくターニングポイントになるような、劇的な変化へと導くのです。自分の内面に巢食っていた悪までもが、命の光なるイエス・キリストによって照らされて、いったん死滅することで、多くの実を結ぶのです。太陽のような強い日差しは植物を枯らしてしまいましたが、命の光であるイエス・キリストの光は確かに自分の内面にある悪を滅ぼしますが、人間存在自体を救うことに本来の目的があるのです。ヨハネ福音書12章24節に『一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ』という言葉がありますが、この言葉はイエス・キリストによって照らされることによって生まれ出る新しい人間存在のことを言っている言葉でもあるのです。もちろん、この御言葉は、イエスの十字架の死によって、多くの人間に真実なる命を与えたことをも示しているのです。

命の光なるイエスの誕生の意味を深く受け止めつつ、私たちの生きる希望であるイエス・キリストの贖いの十字架を覚えて、クリスマスのときを過ごしたいと思います。